

# フロイト思想の在り処

先月号の本欄では、自分のリハビリ病院での体験から「無意識の意識化」「意識の無意識化」という観念についての私見を述べた。今回はリハビリ体験のことから離れて、この観念についてももう少し敷衍してみたいと思う。私はこの観念は日欧の精神医学のキーワードではないかと考えている。

広く知られているフロイトの精神分析学の基礎は、おそらく「無意識の意識化」なのであろう。人間の心の中には当人も気がついていない無意識の領域が存在し、これが神経症発症の素地となるとフロイトはみなした。フロイトによれば、無意識は症者の過去の心的外傷経験（トラウマ）に関連する。心的外傷は、意識されたくはない過去の不快な衝動の記憶であるがゆえに無意識の領域へと抑圧されたものだ、という。症者がもっている、人間生活上の欲望、とくに性衝動と、これを意識すまいとする抑圧との葛藤が神経症発症の原因だとフロイトは考えた。すなわちフロイトにおいては、神経症が形成されるためには、心的外傷の衝動経験が抑圧されてつ

渡辺利夫 わたなべとしお  
 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇一〇年十二月、退任)。二〇一七年六月より現職。

くられた無意識領域が存在しなければならず、この無意識が意識化されれば症状は消失するというのである。

無意識を意識化するには、症者の心の抑圧機構を解除し、症状形成の原因である心理的葛藤から症者を解放する必要がある。療法的に言えば、症者の記憶を症者と医師との精神的な一対話一によって探り、抑圧によって無意識化されていた領域にたどり着き、症者の抑圧が成立した因果関係に医師が解積を与える。無意識の意識化をはかって症者の心理的葛藤を消失に導くのである。

フロイトは、人間精神の最も奥深いところにある無意識的領域を白日のもとにさらし、本能的で衝動的な精神作用の拘束こうそくから人間を解放し、人間を理性と主体性をもつ存在たらしめようと考えたのである。確かにこれは一つの革命的な考えである。しかし、その逆に、「意識の無意識化」という経路もあるのではないかと考えた分析者もいる。日本人の森田正馬まさたけである。今回はこのことを述べてみよう。